

第 40 回庭野平和賞 贈呈理由

庭野平和賞委員会を代表し、第 40 回庭野平和賞を、平和と正義に対するその多大なる貢献を表彰し、インドのラジャゴパール P. V.氏に贈呈することをここに発表する。社会から取り残されたインドの最貧層の人々の福利のため、ラジャゴパール氏が推進する非暴力・平和的手段による諸活動、また、カーストや性別を超えすべての人々に具わる平等な尊厳と権利の認識に向けられたその闘いは、人々の間に大きな賞賛を呼び起こした。とりわけ、武装盗賊団を投降に導いた取り組みと、彼らの社会復帰への援助、貧困層への奉仕を通じた青少年教育、更には貧困層にとって水・農地・森林が最大のニーズであることを熟知した環境保全活動に対して、最大の評価が寄せられている。ラジャゴパール氏による正義のための活動は、農地が収奪されているという現状に立ち向かい、適切な土地改革によって農地とその所有権の再配分を実現することを視野に入れ、種々の団体との対話を重ねながら推進されている。

ラジャゴパール氏のすべての活動は、その手法も意義も靈性に深く根ざしている。彼の思想と行動はガンディー主義(非暴力不服従主義)に立脚し、「社会改革活動は『内なる変容』に始まり外の世界に広がりゆくべきもの」との彼の強い信念に支えられている。その活動基盤にある靈性は、彼の卓越した組織力と一体を為す。その証左は、初期の小規模グループや自助組織による活動を、25万人の小作農民が参加するエクタ・パリシャド(団結協会)などの大規模運動に発展させ、今日の重要な問題に注目を集めるべく、国内外で数万人を動員して徒步行進を実現したことに示されている。

ラジャゴパール氏の経歴は、その内容の豊富さゆえ、沿革を語ることしかできない。1948年6月6日、彼はインド南部のケーララ州のガンディー主義者の家庭に生まれた。彼はカーストへの連想を避けるため、公共の場ではファーストネームのみを使用し、そのことは差別を否定する彼の信念を明確に示している。彼はケーララ州の著名な学校でインドの伝統美術と音楽の学位を得たのち、ガンディー主義による「基礎教育」を行うナイ・タリム方式の教育を受け、農業工学の学位を取得した。自身が語っているように、それは「自分が何を本当にしたいのかを模索する長い旅」であった。

人生の目標が明確になったのは、1970年代の初頭、マディヤ・プラデーシュ州のチャンバル地方に移り住んだ時であった。そこで目にしたものは、不平等や不正の犠牲となった住民による武装盗賊団(ダコイト)が勢力を拡大し、暴力が蔓延している現状だった。ラジャゴパール氏は、他のガンディー主義の指導者たちと共にダコイトの投降と社会復帰を果たすべく、調停者として活動を開始した。そして、この勇敢な行動が、1980年代に展開したもう一つの重要な試み、すなわち、非暴力による社会改革推進を目指す、地域および全国規模の青少年育成プログラム創設への道を拓いたのである。

ラジャゴパール氏による過去 20 年にわたる正義と平和への取り組みは、疎外された地域住民を擁護すべく、非暴力直接行動を通して彼らの地権と生活権を保証することを目的に、大衆による支援団体エクタ・パリシャドを創立したことで頂点を迎えた。エクタ・パリシャドの、地権を求め数万人が参加して行われた徒步行進が成功を収めたことで、社会改革を目指すラジャゴパール氏の積極的行動主義は、国内外でその名を知られるようになった。そして、他団体の協力を得られたことにより、この活動を通して 50 万近い家族に地権が認められ、2006 年から翌年にかけて森林権法の施行が協議された。その後、2007 年と 2012 年にも多数の参加者による徒步行進が実施され、インドの中央政府ならびにマディヤ・プラデーシュ州およびチャッティースガル州の両州政府により、新たな土地改革政策が合意されたのである。更なる先見性に満ちた直近の活動として、2019 年 10 月から翌年 10 月まで、ニューデリーから国連本部があるスイスのジュネーブまで、11 か国を 1 年かけて通過する徒步行進が計画された。行進は新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により中断を余儀なくされたが、その一方で、コロナウイルスの感染拡大と闘うため、2000 人を超えるエクタ・パリシャドの活動家とボランティアたちによる訪問ケアと保健医療の提供が、インドの多くの農村地域において行われたのである。

ガンディーの精神と哲学を活動基盤とするラジャゴパール氏にとって、ガンディーの功績をその理念の実践を通して継承する組織で働くことはごく自然なことであった。彼は、1972 年、ダコイト投降時にはマハトマ・ガンディー・セヴァ・アシュラムの幹事を務めており、2005 年にはガンディー平和財団の副理事長に選出された。現在は、非暴力と平和のための国際ガンディー主義イニシアチブ (IGINP) の専務理事の要職にある。ラジャゴパール氏は、非暴力による社会改革活動を推進するなかで、公共機関との対話を重視するようになり、これまで債務労働に関する最高裁判所調査委員やインド国土改革評議会の評議員などの公職を歴任している。ラジャゴパール氏の目標は、平和と非暴力のための省庁を創設して予算を得ることであり、彼の問いは「戦争、軍備、警察には多額の予算が使われながら、平和と非暴力に少しのお金も使われない」ことに向けられている。

諸宗教対話はラジャゴパール氏の積極的行動主義の本質であり、そのことが宗教を異にする貧困層の人々が互いの壁を超えて共に権利を主張し、非暴力の抗議活動に結集する要因となっている。抗議デモには、まさにあらゆる宗教の農民たちが肩を寄せ合い参加しているのである。

ラジャゴパール氏が始めた取り組みが、何年も以前から彼の祖国である大国インドの国境を超え大きな運動となっていることは、エクタ・パリシャドの活動がヨーロッパをはじめ世界の国々に影響を及ぼしていることや、ジャイ・ジャガット運動が国際的な反響を呼んでいる事実などからも明らかである。ラジャゴパール氏の視線の先には国際連合の存在もある。彼が「非暴力経済」と呼ぶ理想の実現に向け、この主要な国際組織がその協力者になることが彼の願いなのだ。

新型コロナウイルスの感染拡大は、相互関連を深める現代社会の負の側面を浮き彫りにし、私たち人類にグローバル化の再考を迫った。その直後の 2023 年に、第 40 回庭野平和賞をラジャゴパール氏に贈呈することは、非常に大きな意義を有すると私たちは考える。グローバル社会に特有な諸問題に取り組むなかで、ラジャゴパール氏の積極的行動主義は、土地や大衆に密着するその特性を活かし、開発の場における倫理と正義の復権を果たしている。究極において、彼の活動は持続可能で人間らしい開発のありかたを大衆に取り戻そうとする取り組みなのである。

庭野平和賞委員会 委員長

フラミア・ジョヴァネッリ